

中国近世都市漢口と『漢口叢談』

川勝, 守

<https://doi.org/10.15017/1955683>

出版情報 : 史淵. 129, pp.87-117, 1992-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

中国近世都市漢口と『漢口叢談』

川 勝 守

はしがき

漢口の地は、漢水が長江に流入する北岸にあり、漢陽・武昌とともに今日は武漢市を形成し、華中きつての大都會である。長江を遡れば洞庭湖周辺の米所や岳陽樓の名勝から四川重慶・成都の地に続く。その奥には銀・銅産産源豊かな雲南・貴州があり、四川の木材、四川・湖南の米とともに漢口の市場に集積されたのは明末、一六、七世紀以来のことであつた。長江を下れば、江西の九江、南昌、さらに安徽の蕪湖を経て江寧南京に至り、さらに鎮江で南北の大動脈たる大運河に合し、南に常州・無錫さらに蘇州・嘉興・湖州・杭州と行く。長江最下流には近代中国最大の都市上海がある。鎮江から北へ運河を取ると揚州・淮安・徐州から山東諸都市さらに天津・北京へ至る。

西から東への長江水運と漢口で南北に十字に交わる交通路は、北へ河南洛陽・開封、ここからも京漢線で北京へ至る。また、西北へ路を取れば長安（西安）がある。南は湖南から広東嶺南である。粵漢線が通る。漢口が九省の通道といわれるのは少しの誇張もなく、交通要路を示すものだ。しかし、都市漢口の成立は、多くの中国都市に比してそ

の歴史が新しい。その歴史的運命が全く共通するのは上海市である。

漢口の名は、魏晉南北朝時代から散見するが、唐代までは詩人がその風景、いわゆる江南水郷の名勝を賞でた位であったが、唐末五代からにわかには市街化が始まり、酒樓などが並ぶ繁華街ができ、宋代には一層発展をみた。しかし、その画期的な発展は、一六・七世紀の明末清初であった。以後、近世近代中国では河南の朱仙、江西の景德、広東の佛山とともに中国四大鎮の随一といわれるまでになった。一八五八年の天津条約により開港、長江河口から一千キロメートルの内地にもかかわらず、夏期には五千トンの貨物船が航行でき、当地特産の茶、綿などを積み出し、上海に続く中国第二の貿易港であった時期もある。加えて清末の湖広総督、張之洞の洋務近代化の努力により、近代工業地としての基礎が築かれ、広大な背後地と周辺の豊富な原料、労働力と交通の至便が加わって中国の心臓ともいふべき重要地となった。一九世紀末から二〇世紀にかけて帝国主義列強は競ってここに租界や租借地を設け、英・露・独・米・日本などの進出があつた。そのため漢口は上海と並んで世界に名が知られるようになった。

以上のごとき漢口の都市形成の原動力は何であろうか。ウィリアム・T・ローウェWilliam T. Rowe教授は、一七九六—一八九五年（嘉慶元年—光緒二十一年）の漢口社会について、(一)商業と社会、(二)闘争と共同社会の二編に分けて中国近代都市形成の一典型としての歴史を叙述している。¹ その編別構成は、(一)第一冊商業と社会、序章、ヨーロッパと中国の歴史における諸都市、第一部市場交易、1。一九世紀の漢口、2。漢口の取引、3。塩交易、4。茶交易、5。漢口における信用と金融、6。国家と商業、第二部都市社会機構、7。移住都市における地方出身、8。ギルド制度、9。ギルド機能、10。ギルドと地方権力、結論、(二)第二冊闘争と共同社会、序章、初期近代中国都市、第一部都市、1。都市の人々、2。都市空間、第二部共同社会、3。民衆の福利、4。公共財産と公共事業、第三部都市闘争、5。闘争の諸組織、6。危険な諸階層と労働諸階級、7。真実の信奉者たち、第四部支配、8。秩序の諸権力、9。危機と対応、結論、以上。

本書に示された中国都市像は、種々の点で筆者（川勝）の中国都市に対する理解²と共通する。簡単にいえば、漢口のような中国近代都市は都市住民の諸闘争によって、都市社会が形成され、また、国家・行政と商人・労働者諸階層との絶えずの緊張関係の中で都市の発展があつた、というようなことである。これは中国都市も西欧諸都市と比較が十分可能になる諸歴史事実の指摘である。民主と人權の歴史が中国前近代に遡ることは確実なのである。しかしながら、ローウェ教授の著作には欲を言えば、というよりそれ故にこそ重大な欠陥がある。一七九六年以前、特に一八世紀の雍正、乾隆期、さらに一六・七世紀の明末清初のそれぞれの漢口の都市社会と都市住民はどのようなものであつたかの歴史叙述がないからである。漢口の（多分上海もいえるだろうが）近代中国都市としての内容は理解できても、例えば蘇州・杭州・南京・北京・広州等々の他の中国都市との関連性が追究できない。また、都市漢口の人々の内側からの証言が少ない。漢口の都市形成史、都市の発展史を漢口の人々がいかに記憶していたか、これの検討は重要であろう。ここにこそ地域史の叙述の主要素材があると思われる。その点でローウェ教授の大著はやや物足りなさを感じる。ローウェ教授の大著に何かをつけ加え、都市漢口の一八世紀以前の歴史叙述を試みるならば、やはりローウェ教授の大著並みの紙数が必要である。それは今後俟つとして、とりあえず、都市漢口の住人側の証言たる『漢口叢談』を紹介することから始めることとする。

一 『漢口叢談』の成立とその凡例

一六一八世紀に漢口に起つたさまざまな出来事や都市社会漢口の風俗、人々の生活、さらには詩詞の会から茶館、酒樓の世間話、殷周金石文の學術情報交換等々といった、漢口に関係した凡百万般にわたることを綴つた筆記体の作品に『漢口叢談』六巻がある。³ 著者は浙江省湖州府烏程県南潯鎮の人范錫、清の道光初年（壬午二年、一八二二）の

刊本がある。范鏞、初名音、字は声山、号は白舫、また苕溪漁隱と号した。烏程の南潯鎮は、同じ湖州平野の烏青、菱湖、双林の諸鎮中最大、杭州の塘棲鎮、吳江県の震沢、盛湖、平望の諸鎮とも肩を並べ、それを頭一つ抜きんでた江南市鎮最大の都市であり、優に吳城に匹敵していた。彼は南潯の読書人の家に生まれ、例貢生となった。その遠祖には、明の国子館祭酒となった范応期（と）がいるが、その没後に一族は各郡に散じ、祖の類通、字希賢、号棲園は監生となったが、脈理（即ち中医）に精しく、杭州塘棲鎮から南潯鎮に帰ってきた。著に「研北居瑣録」があり、故里文献に採録されている。父の宗鏞、字学周、号検齋もまた監生、潯著二巻を輯した。その子鏞はすぐれた才があつて詩に巧みであつたが、特に詞をよくした。詞は宋代に大流行し、特に江南人士に好まれた。例貢生になつたので仕官もできたが、それをせず、中年になつて四方に遠遊し、交友關係を拡大した。塩取引に關係して四川や湖南・北に往来すること三十年に及び、漢口に僑寓して当地の先人、友人の文章を輯集して『漢口叢談』六巻を作つた。しかし、彼は漢口の人になれ切つたわけではなく、郷里南潯にもしばしば帰り、南潯鎮のために『潯溪紀事詩』七十首を作っている。漢口と南潯の往来を常としたが、最晩年は揚州に寓居し、ここで八十余才で卒した。揚州また塩の大商人が多く住む江南きつての豊かな都会で、乾隆、嘉慶に文学、学問の花が咲いた地であつた。鏞の卒年は道光二十四年（一八四四）夏と伝えられる。とすれば、范鏞が中年で南潯鎮から四川・漢口・揚州へと寓居を転々とした時期は、ほぼ嘉慶元年（一七九六）以後四十余年のことであつたが、その初め、丁度彼は四川（重慶？）に居た時に嘉慶白蓮教徒の大反乱が四川・湖北・陝西各省に勃発している。范鏞も『漢口叢談』巻四の文中で備に大反乱の叙述を行っているが、漢口の街もその脅威に曝され、鏞は四川から漢口へ、また揚州へと居を転じ、これが卒年まで居を一定させない因となつたものと思われる。鏞が揚州に最期を迎えた時には、アヘン戦争に伴つて英軍艦が長江を遡り鎮江・南京に及んだ頃で、これをも親しく眼のあたりに見て、中国近代の激変に遭遇している。ただし、この点については別に考察を加えることとしたい。

范鍇が詩に巧み、特に詞の達人であったことは先に述べたが、それは江南人士、長江流域の文人の常であった。鍇が手本にしたのは宋の姜史蘇辛、すなわち姜夔（白石道人）・史達祖（梅溪史邦卿）・蘇軾（東坡）・辛棄疾（稼軒居士・辛幼安）で、姜・史は詞の名手、蘇辛は詩文の主魁であった。なお、鍇が手本とした宋の姜史蘇辛は江南人士の誰もが範とするもので、その限りで范鍇の交友も共通した師弟関係にあった。

范鍇は初め漢口に来たとき、黄均、字穀原、号墨花居士のもとに同居し、無二の親友となったが、やがて黄均は漢口から鄂州に移った。彼は蘇州府元和県出身、山水花卉画に巧みで、後、道光中内庭に供奉し、書画譜を修した。当代の一流のひとりであった。范鍇と漢口で終止交友関係を持ったのは常道性、字芝仙であった。安徽無湖出身で書画に長じ、晋唐宋元の大家の法を継承した。彼もまた当代江南文人の代表のひとりであった。いづれ後述するが、W・T・ローウェ教授も指摘するように、一九世紀初頭の漢口は完全な移住民、他所者の都会で、范鍇が交わった人士も新安商人徽商出身の塩商人をはじめ、長江流域を往来する下流デルタ人士等が多かった。それでは范鍇は寓居先の漢口についてなぜ『漢口叢談』のごとき地方出版を思い立ったのであろうか、まず、凡例をみよう。便宜的に番号を附し、以下に本文叙述との対応をみる。

『漢口叢談』 凡例

(1) 一、漢口水源、為東漢水、有沔・漾之名。亦曰夏口。前人岐說紛紛。今証以經史、其間別流支川会于漢者、亦為臚列。按載古注以辨之、欲其眉目清晰也。閱者幸勿訝其繁贅。彭湘懷『漢口攷』一篇、余未見之、故錄入。

(2) 一、漢口重鎮、坊市街衢、花宮梵宇、指不勝屈、今就大略紀之。若招提會館、或有文人題咏、尚冀同志者錄示、再為編統、幸甚。

(3) 一、漢口人物、地雖一隅、亦復不少。但已採入邑乘者、自可不煩贅記。

(4) 一、漢口市井、俗漸澆漓、生計勞勞、反衰于昔。安得起而振之、復歸醇厚、是以前人嘉言懿行、因類紀之、俾閱者

警心神悟。至于逸事奇聞、略有涉于漢口、亦為附載。

(5) 一、漢口青樓、墨池幽巷、饜饜羶葷、自不足錄。但今昔詩人無不流連江漢、形諸篇什、花月新聞、『板橋雜記』、亦前人所不棄。因取黃心齋『漢口漫記』、吳格齋『閑情麗品』、有關於風雅詩詞者錄之。

(6) 一、『説文』、叢、聚也。談、語也。余少失學、夤陋美多、性復疏懶、落落寡交。其中或為漢口世籍、或為漢口寓公、詩文之集、無從借閱、又恐久而淪沒、故雖不閱漢口者、亦聚而語之。隨得隨書、既無倫次、亦多挂漏。叢坐之談、即謂之詩話亦可。

(1) は漢口の水系水路を中心とした地理・人文知識であるが、彭湘懷著『漢口攷』は未見という。『漢口叢談』巻一・1A—28Bであるが、その構成は水系水路（禹貢、山海經、戰國策、漢書、水經注、通典、元和郡県志、輿地紀勝、玉海、華陽国記^志の諸書を引く）、沙州の生成、隄防攷、諸水の変遷、漢口の事件、漢口の役所衙門、諸宮建と続く。

(2) は漢口の市街構成であるが、『漢口叢談』巻一、1A—28Bで、最初に河街、正街、中路、中路後、隄街、玉帶河橋、隄外にわけ会館公所や仏教寺院、道教廟觀などを挙げて説明をしている。

(3) は、漢口の人物であるが、『漢口叢談』巻三にあるが、『漢陽県志』との重複は避けるという。

(4) は、漢口の近時の風俗、人々の生活ぶり、等であるが、『漢口叢談』巻四に当る。ここで近時とは、著者范鎔が漢口に滞在した嘉慶初年より道光年間まで、一八世紀の極末から一九世紀の最初の四半世紀までである。

(5) は漢口の色街、歓楽街の様子であるが、『漢口叢談』巻五・巻六を中心に叙述される。黄承増、字心齋、徽州歙県の人の『漢口漫記』吳格齋の『閑情麗品』が参考になったというが、両書の現存は確認できないので原典の比較は不可能である。

(6) は『漢口叢談』は筆者范鎔が漢口で種々の人々から見聞した出来事を折にふれて書きとめたものを編集したものだという。

以上の『漢口叢談』の凡例からでも、著者范鏞が漢口に関係した諸記事をいかに綿密に収集したかがわかる。以下本文内容に即して若干の項目について本書の内容を紹介しておきたい。

二 漢口の環境と都市景観

一九世紀初頭の漢口の街市の結構について『漢口叢談』巻一には、

漢口鎮在城北三里、有居仁・由義・循礼・大智四坊、当江・漢二水之衝、七省要道、五方雜処、分為上下二路。居仁・由義二坊為上路、自艾家嘴至金庭公店、属仁義司汛地。循礼・大智二坊為下路、自金庭公店下至額公祠、属礼智司汛地。

とあり、漢口鎮は漢陽県（湖北省漢陽府）城の北三里（一・五キロメートル）にあり、居仁、由義、循礼、大智の四坊が有る。居仁、由義二坊が上路で艾家嘴から金庭公店に至り、仁義司汛地に属す。循礼・大智二坊は下路で、金庭公店下から額公祠に至り、礼智司汛地に属す。同治七年（一八六八）修『繞輯漢陽県志』巻一輿図、漢口鎮には四坊に対応して居仁門、由義門、循礼門、大智門の四門が西南より東北へ一直線に並んでいる。また、同『漢陽県志』巻三疆城志、附坊市集鎮村落によれば、居仁、由義、循礼、大智の四坊が漢口鎮にあり、額公祠から艾家嘴まで長さ十五里（七・五キロメートル）という。

漢口の都市景観については、『漢口叢談』巻二に、

漢口自明以来、久為巨鎮。坊巷街衢、紛岐莫絵。是以按邑志之凶、尚有差池未尽。盖因其形如眠帚、上直而下広、其広処則街術重重、難以縷紀故耳。今就大略而言、則正街与堤街独長。自楊家河以下、始有河街、抵王采坊、止大馬頭上下。旧時亦有河街、近因水決岸隕、逐年崩潰、直達正街矣。自大通巷後以下、始有後街、至陞基巷後、

復分而有夾街、迨接鷺嘴後、則夾街中更有夾街、因地広而人烟益稠密也。若堤街則自上関起、直至大智坊之堤口、迤邐由東而北、曲沿外江、形似帚末、又上広而下鋭矣。隄街之後、夾以小河、名玉帶河、夏秋水漲、可通舢舨、今半淤塞、未能直行、而上下多有木橋以渡、猶始故也。過橋、俗呼為堤外、昔時荒沙一片、嗣則居民叢聚、漸成一街市。再後乃謂黃花地、上如天都庵・大觀音閣、下如雷祖殿・三元殿之傍、咸築隄以通後湖茶肆。堤街之前、為正街、沿江而下、至于下関。茲姑先記正街坊巷之名、上仁義司汛、下至礼智司汛地、列載于後、則河街、後街、夾街、堤街可循而覓、不致迷途矣。僧寺尼庵、亦藉以附焉。但余老懶倦歩、未能周及、或其持漏、覽者幸勿晒之。

ここに邑志とあるのは嘉慶二十三年修『漢陽県志』であるが、それに掲載された漢口鎮図は同治『漢陽県志』にも転載されている。これは別図に示す通りであるが、その形は地に横になった箒の形をしている。上直下広、広い面に沿って正街、堤街があり、さらに河街、後街、夾街となる。漢口中心街の北辺には隄防があり、その背後の北側には後湖があつて茶肆が並んでいる。漢口市街の街区ごとの諸施設建物は表1のごとくである。

表1 漢口鎮街巷

	河街	正街	中路	中路後
1	通鎮寺			
2	上 闕			
3		太平巷 外五甲		
4		郭家巷	長生庵	
5		大橋口		
6			●興 龍庵	
7			●宗 武廟	
8			天 當官	
9			●閔 天聖殿	觀音庵
10		●唐家巷 屈仁坊	万 寿庵	炎 官堂
11			四 官殿	
12		●天 宝巷	送 子庵	
13		清 遠巷	●天 宝庵	
14		青 蓮巷	●静 忠義殿	
15			海 蓮庵	
16		安 定巷	祇 園庵	
17		謝家火路		
18		劉烟子巷		軒 轅殿
19		●崇 仁巷		葉 師庵
20			寿 弥庵	指 月庵
21				字 藏閣
22		蔡 家巷		
23		●仁 義司署		
24		●楊 家河巷		
25		尚 義巷		
26		●朱 家巷	太 清宮	太 平庵
27	西來庵	●至 公巷	蓮 生庵	
28	宝樹庵	●三 善巷		
29		●大 通巷		
30			準 提閣	
31		●仁 里巷	太 平觀	
32			福 田庵	
33			長 寿庵	今殿
34			百 子庵	又祠
35			痘 姥庵	今
36			自 修庵	今
37		板 子巷	改 裕麟庵	
38		●遇 字巷		

39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79

●大王廟
●永玉河

●五頭廟 馬頭巷
●大亨巷 隆巷 仁巷 安巷 家巷 坊巷
●利濟巷 仁巷
●体寅字店
●五彩坊 永寧巷
●大水巷 金庭公店
●廣福巷
●陸基巷 循礼坊
●沈家廟
●新馬頭

五頭廟
三宮殿
●老官廟
●東嶽宮
法紹興會館

松齡巷 觀音殿 雷祖殿 蓮慧庵
大士閣
●新火路 旌德會館 憐書庵
●大火路
廣東會館 玉竜庵 盛頭庵
白衣庵
百家巷 九如橋
新安書院 陶家巷 燕家巷

財神殿 文昌閣 鎮江會館 萬福庵 滿多華 月宝殿 壽仙符君公園 提提廟 帝廟 麟家王隱佑 師殿 鍾山書院 文昌閣 浙寧公書院 琴谿波宮 澗波殿 皇殿 三皇殿 準提庵 三元殿 長寧慧觀 福大道 送駕郎 老廟

仁壽宮

80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121

●馬王閣

●流通巷
接駕嘴
遵義巷
●田家巷

●鮑家巷 大智坊

老興巷
咸寧馬頭

●大馬頭 正街至此分而為二、一稍南而東、為打扣巷。一由北而東、為黃陂街

財神廟
黃陂街
海家堂
御駕橋
月宮橋
瞿家巷

●楊千總巷
●十方庵
通真寺
烟包巷
延壽庵

●緯子街
慧蓮庵
三義殿
吉祥庵
閔聖殿
花布街
涂家場
海會庵
魯班閣
蒙公祠
清真寺
万壽庵
中州公所
香虛道
青賢院
普聖寺
妙蓮庵

漢楚善義殿後
●戲子街
千弘庵後
福建庵後
齊魯公所
●長盛盛街
青蓮蓮庵
新盛盛橋
●喬家巷
如意道院
如老師廟
法雲庵
紫竹林庵
覺南嶽殿

福壽庵

忠義殿
祝聖宮
万壽宮

122	●磚瓦巷	水府廟		●礼智司署	
123	●打扣巷	●打扣巷		●戴家庵	
124	柯家馬頭		天符廟	長生閣	今為豫章公所
125	●竜王家廟	●剪子街		九華殿	
126	柳家巷	●靛行街		老君殿	
127	後慈航閣	●大興巷		帝主殿	
128	王家巷			鳳岡公所	
129	王紙街			青龍街	
130		●衣舖街	●四官殿	戎平會	
131			●廻竜寺	太平會	
132			●内雷祖閣		
133	轎子街				
134	蘆蓆廠				
135	●米大王廟				
136					
137		董家巷	長郡公所	●沙家巷	
138				太平家	巷庵
139				不家	灣庵
140				紫二雲	殿
141				三天	殿
142				普度	庵
143				角齋	亭
144				士	宮
145					閣
146					
147		●郭家巷	離明宮		
148		水陸副署	十人館		
149		●馬王廟	斗姥閣		
150	通津橋				
151		隄口		興隆街	打銅街
152				老君殿	廣福寺
153		竜家巷			
154	天符閣	周家巷			
155		小蔡家巷			
156		●大蔡家巷			
157		洪益巷	松筠庵	磨子橋	清和宮
158		張美之巷	土皇宮	白布街	
159		小関帝廟			
160		修來庵			
161		熊家巷	老君殿		
162		苗家馬頭	小董家巷		
163		漢義殿		嬢嬢殿	

206		宝林橋	宝林庵
207		三元橋	三元殿
208	古三皇殿		
209	孫祖閣		
210		六度橋	六度庵
211	棉花街		
212	南嶽殿		
213	大京南寺		
214		万寿橋	木蘭第一宮
215		広益橋	
216		保合橋	
217		太和橋	
218		双寿橋	
219		通津橋	
220		出江木橋	

●印は同治『漢陽県志』巻一漢口鎮図に記載。

表1の漢口鎮市街区の街巷、諸建物の並ぶ順は、同治『統輯漢陽臬志』卷一輿図の漢口鎮図の西隅より始まり、東方して大碼頭に至り、そこで北向して通濟門辺へ行くものである。因に両者に共通する名称を列挙すれば、興竜(隆)庵、宗三廟、閔聖殿、唐家巷、天寶巷、靜室庵、崇仁巷、仁義司署、楊家河、朱家巷、至公巷、三善巷、大通巷、仁里巷、遇字巷、五頭廟、大亨巷、泉隆巷、存仁巷、万安庵、大王廟、老官廟、利濟巷、体仁巷、東嶽宮、永玉河、五彩坊、新火路、永寧巷、大火路、大水巷、盛頭庵、広福巷、陞基巷、沈家廟、三皇殿、新馬頭、陶家巷、流通巷、楊千綫巷、戲子街、禹王閣、十方庵、田家巷、長盛街、喬家巷、鮑家巷、緯子街、大馬頭、磚瓦巷、礼智司署、打扣巷、竜王廟、剪子街、大興巷、衣舖街、四官殿、廻竜寺、米廠、沙家巷・郭家巷、馬王廟、大蔡家巷、以上である。街巷が圧倒的に多い。施設建造物では仁義司、礼智司兩署、米廠のほかは、閔帝、五頭、大王、老官、東嶽、沈家、竜王、馬王等の廟宮か閔聖、三皇、禹王、四官等の閣殿、廻竜寺など、いずれも道教仏教の宗教施設が多い。表1のリスト中に挙げられているもので、『臬志』漢口鎮図に全く姿のみえないものに会館公所がある。14天印公所、46鎮江会館、48紹興会館、52旌徳会館、57広東会館、59金庭公店、69浙寧公所、85齊魯公所、108中州公所、128鳳岡公所、131太平会館、197文苑公所等である。『漢口叢談』卷二の上掲部の続きには、

漢口東達呉会、西通巴蜀、是以瑰貨方至、縲賄紛陳、鬻良裸苦、既引既遷。居斯地者、半多商賈致富、書奇風雅、勿尚、故会館公所之名、野墅琳宮之号、楹帖榜額之文、悉皆從俗、未能雅馴、至于金石碑碣、明以前無故、後亦寥寥無録者。

漢口は東西四通八達の交通要所で四方の商人が集まり、同郷同業の集りである会館、公所が数多くできたという。なお、会館公所は上掲リストだけではない。『漢口叢談』卷二には、

46大王廟、饒商公建、祠宇巍煥。址後直達正街、為塩務公議之所、是以供帳甚華。

194 天都庵、為巖商公所。(下略)

60 西関帝廟、為山陝公所、極為壯麗。後有春秋閣、閣上記文一篇、書之于屏、款為劉曾、不知何許人也。

125 九華庵、今為豫章公所。南昌毛晚滄方琮、擅詩画、爽直喜交游、僑寓庵中數載矣。

先の表1リスト分を含めて会館公所を各省に分類してみよう。

江蘇——14 天印公所(南京江寧東南に天印山あり)、46 鎮江会館

安徽——52 旌徳会館、131 太平会館

浙江——48 紹興会館、59 金庭公店(金庭は浙江紹興府嵊県の東にあり)、69 浙寧公所

江西——128 鳳岡公所(江西撫州府崇仁県)——125 豫章公所(もと九華庵)

広東——57 広東会館

河南——108 中州公所

山東——85 齊魯公所

山西陝西——60 山陝公所

その他、不明——197 文苑公所、46 大王廟、194 天都庵(ともに塩商公所、江蘇、揚州か)

漢口の会館公所はその地理的位置と関連し、長江下流の江西、安徽、江蘇、浙江が多く、また、南の広東、北の河南、山西、山東各省のものがある。

『漢口叢談』文中より漢口の環境と歴史的都市景觀に関する叙述をさらに拾ってみよう。

① 董承叙曰、漢水至濁、与江湖水合、其流必澄、故常填淤。而沮沢之区、因成沃壤、民漸芟剔、墾為阡陌。又因其地之高下、修堤防以障之。大者広輪数十里、小者十余里、謂之曰院。……按漢口一鎮、提高地濶、或無此患。

然近年來、大馬頭以下、被水衝潰、昔時街市、今成河涘、長及里許。錄此以為有守土者講求水利之一助云。（卷一 7 B—8 A）

②許纘曾『滇黔紀程』、由漢口陸路沿江東北行、若時值二・三月、黃花瀾漫、千頃一色、土人謂之黃花地。惟漢上有之、他処所罕見也。（卷一、9 B）

③唐裔漢『風水論』云、漢陽府城龍脈、自九真山發源、從西門入城、先結鳳棲府基、後結大別北障。而大別山頭、從東拖下、余氣自木場走南岸、以為後託、直至月湖口方止。其上即有臥虎山・黑石山、鎮鎮兜住、十分有力、是南岸為府城後託矣。漢口龍脈、乃平洋龍也。平洋最宜坐空朝滿、今漢口以大別為朝山、南岸為近案、後漢空曠、正合坐空朝滿之局。從前未盛者、以水未繞也。（卷一、13 B 14 B）

④明成化初、水通前道、故河遂淤、于是漢口有興機矣。蓋漢口初一蘆洲耳。洪武間未有民居。至天順間、始有民人張添爵等祖父在此築基蓋屋、嘉靖四年丈量、上岸有張添爵等房屋六百三十間、下岸有徐文高等屋六百五十一間。

漢口漸盛、因有小河水通、商賈可以泊船、故今為天下名區。經云、行到平洋莫問踪、祇觀水繞是真龍。又云、風吹水激壽丁長、避水避風真絕地。漢口之盛、所以由于小河也。（卷一、14 A）

⑤按宋時漢陽南市之盛、甲于他郡、後為江・水衝蝕、舟莫能停、是以商賈貨物、咸集于漢口矣。（卷一、16 B）

⑥明万曆元年題准、湖廣衝・永・荆・岳・長沙漕糧、原在成陵磯交兌者、改併漢口水次。十一年、漢口交兌于金沙洲陳公套水次。（卷一、17 A）

⑦『眞志』、漢口渡有六、一在宗三廟、一在五頭廟、一在老官廟、一在沈家廟、一在接駕嘴、一在四官殿也。又郭師口渡、在漢口西外五甲。平塘渡、在漢口上十里、一名琴堂、相伝為伯牙彈琴処。蔡店渡、又在上六十里。此皆漢口渡河過郡城之路也。今則処処有渡、招招舟子、印須我友矣。（卷一、17 A）

⑧又老官渡集、在城西八十里九真山下。其西五里、有索河集、夏秋水漲、貿遷者甚輻輳、平時則收買白布販販漢口

鎮市小民、夜成匹、朝則抱布以售焉。(卷一、17 A)

⑨『瀨黔紀程』、漢口南數里、為漢陽府治。東渡江、即武昌府治。十里之內、置郡者二、盖上当瀨黔奏蜀之衝、下控左右兩江之要、故特于此嚴鎖鑰焉。(卷一、18 B)

⑩宋陸游『入蜀記』、……沿江邊隄上、民居市肆、數里不絕。其間復有巷陌、往來懂懂不絕。又鄂清移舟口、回望堤上、樓閣重復、灯火歌呼、夜分乃已。按此即『吳船錄』所謂南市也。(卷一、19 A)

⑪袁公隄、明崇正八年通判袁焯創築。自後居民漸集、即今之隄街也。在漢口鎮後。鎮為水陸要衝、烟火數百万家。漢水經其南、湖水繞其西北、大江橫其東。旧志謂、每值夏秋水漲、四面巨浸、僅賴此隄為壓居保障。里人歲加修築、終未完固、水勢若虐、即慮汎溢云。此昔時之形、今則民居鱗比、十倍于前、但名隄街、幾不知為湖隄矣。(卷一、20 A)

⑫隄後深溝、廣約一、二丈、襟帶隄街、由上路之大橋口起、直至下路隄口、長十有余里、名玉帶河。旧時大橋口下、襄水入河、別繞鎮後、至隄口東南流入江。襄河本曲折而下、又在鎮後左右回環、所以財聚。漢口之盛、甲于天下。今大橋口外、沙漲日高、玉帶河逐处淤塞、或有居民架屋于上、至于隄口、市廛相接、莫知出江之道矣。余昔年在漢、夏水漲入、猶見小艇往來、好事者作避暑之游。今故道尚存、不通舟楫。而河上木橋橫跨、或相距里許、或半里許、在在有之。過橋謂之隄外、復有土人築室聚居。近已上下成衢、且有招提·梵宇·會館·公所、以愒游人。再後則為後湖、俗名黃花地、又名瀟湘湖、即昔之龐襄河也。(卷一、20 A·B)

⑬後湖即龐襄河旧地、北距黃陂、孝感境三十余里、東西數十里、平曠曠野、弥望無垠。春時叢樹扶疏、芳草鮮美、覆雲在地、流靄接天、浪翻麥隴之風、香馥菜畦之露。復有茶肆羅列、歌管紛誼、百鳥鳴籠、時花当戶。(卷一、20 B·21 A)

⑭後湖茶肆、上路以白樓為最著。白樓者、白氏之故址也。在大觀音閣後、百弓地闊、畚土墾塚、編槿為籬、積石成

徑。中構小樓、作東西兩箱。軒窗豁達、檻曲廊回之内、皆設小座、以供茗坐。外復四植楊柳、綠陰垂幄、翠浥襟帶間、又築隄以高之、大水不沒、可通游人往來。(卷一、21 B)

⑮後湖之有茶肆、相伝自湖心亭始。近者涌金泉・第五泉・翠蕪・蕙芳・習習亭・麗春軒之名為著、皆在下路雷祖殿・三元殿後。其余尚有數十処、弦歌誼耳、士女雜坐、較上湖游人更盛。湖心亭、地頗疏散、藝花壘石、位置亦宜。……涌金泉、更為爽塏、復積年畚土築石以高之、更造小樓重閣、白石紅欄、掩映于綠楊陰裏、殊有幽致。登樓四眺、北則黃陂之風火、木蘭二山、相距或數十里、或百余里而遙、霽色雲開、翠微遙露。西南則漢陽之三山、黛影參差、常列窗外。三山者、旧志所謂其山三峯竝峙、一仙女、二樓子、三馬足、故又名三山景也。南則大別當前、花宮琳宇、暈彩曜丹、靜坐試茶、似聞鐘梵。東則大江橫遠、橋立颿飛、時与烟雲起滅。而湖中遠近、又有土阜布列數十処、鄉人築室聚族而居、以藝湖地菜麦者、故諸墩皆以姓氏名、如吳家墩・朱家墩之類、旁多植以雜樹、遠望若山林。(卷一、22 A・B)

⑯後湖、俗名黃花地、土人墾作、徧種菜麦、近成沃壤。菜花齊放、麦穗低垂、一片黃雲、斜陽燦色、真如七宝莊嚴、布金滿地。……有句云。紅袖嬉茶社、青帘動酒人。參差凡慢談医卜、高下樓台弄管弦。皆美録也。(卷一、22 B 23 A)

⑰漢口鎮在郡城南岸。西則居仁、由義、東則循礼、大智四坊。廬舍櫛比、民事貨殖、蓋地当天下之中、貿遷有無、互相交易、故四方商賈、輻輳于斯。三国時、市盛于石陽。「陸遜伝」、還攻石陽、石陽市盛、人奔入城、門不得闔、自斬數十人、門方可閉、吳遂虜其在外者數千人而還。迨唐宋、則集于南市、李習之、陸放翁所記是也。元暨明初、又萃于金沙州。宏治以後、沔水于郭師口直冲入江、而漢口遂有泊船之所、乃市列漸盛矣。茲漢鎮人烟數十里、賈戶數千家、嵯商典庫、咸數十処、千櫓万舶之所帰、貨宝奇珍之所聚、洵為九州名鎮。然肇于有中葉、盛于啓正之際、其間屢遭兵燹、人民散亡十之八九。百余年内、文献莫徵。自我國朝平治日隆、休養生息、万里版圖、漸仁

摩義、豈僅化行江漢。是以人才輩出、名利兼修、即区区一鎮、亦勝于郡邑。孝友忠貞、摛文游藝、多有足称者。録邑志之遺、採里人之說、叢脞紀之、以資揮麈。(卷三、1A・B)

以上の文言から漢口鎮の環境や都市景觀についてまとめてみると、次のとおりとなろう。(一)漢口は長江と漢水その他諸水が流入し、それら河川が運ぶ土砂によつて土地ができたが、その維持のためには堤を築き、「垸」とよぶ施設が必要であつた。(①)。(二)周辺一帯は春には菜種の花(油菜)が咲き、一望黄色、土地の人は黄花地とよんだ(②・⑬)。(三)地勢は漢水を隔てて南方の漢陽景城側が高く、九真山より大別山に至る山脈があるのに対し、漢口の地は低く、風水説では平洋竜とみなされた(④)。(四)宋代では漢陽景城側の南市の方が盛んで沿江辺の隄上に市肆が数里も続き、市街を作つていた(⑤・⑩)。(五)その後長江、漢水の流れの變化から、舟が漢口に停るようになり、明の天順、成化ごろより民居も築かれ、漢口が市街化した。嘉靖四年の丈量では上岸に張添爵等の房屋六百三十間、下岸に徐文高等の屋六百五十一間があり、商賈貨物がみな漢口に集つた(④・⑤)。(六)明の万曆元年(一五七三)から湖広の衡州、永州、荊州、岳州、長沙の漕糧が漢口鎮水次で船の積み卸しが行われるようになり、同十一年漢口の交兌は金沙州の陳公套水次倉で行われるようになった(⑥)。(七)漢口附近には南に漢陽府城が東に武昌府治が十里の内に二つもあるが、長江上流の雲南、貴州、陝西、四川各省と、下流の江西、江東を結ぶ要地であるためだ(⑨)。(八)漢口附近には渡江用の渡として六渡がある。その多くが宗三廟、五頭廟、老官廟、沈家廟、四官殿とよぶ宗教施設附近である。しかし、その他郭師口渡、平塘渡、蔡店渡があり、漢口と漢陽府城を結ぶ交通となつていたが、今では処処至るところに渡がある(⑦)。(九)また老官渡集が城西八十里にあり、さらに西五里に索河集があつて、綿布の白布を生産しては漢口に貿易に来る(⑧)。(十)明末崇禎八年(一六三五)袁公隄が築かれてから、居民が集住して隄街が形成され、漢口鎮の裏通りとなつた(⑩)。(十一)隄街の裏に深い溝があるが、ここにも橋がかげられ、それより先にも市街が続き、招提、梵宇、會館、公所が建ち並んだ。その後には後湖、俗名黄花地、また瀟湖湖とよぶ地がある(⑫)。(十二)後湖には茶肆が並び、歌管紛

誼の漢口きつての歓楽街となつていた(13)。(14)後湖の茶肆には白樓、湖心亭のほか、涌金泉、第五泉、翠蕪、蕙芳、習習亭、麗春軒の名が著しかった。みな下路雷祖殿、三元殿の後にあつた。これらは涌金泉のごとく積年土を盛り石を築いて湖辺に建造したものであつたが、いずれの茶肆も数階建の重閣樓であつた。ここから回望する眺めは極めてよく遠く山々が遠望できた(15)。(16)漢口は三国時代より交通の要地、商賈の輻輳地であつたが、唐宋時代までは南市が盛んであり、元代に金沙州に移り、明の一五世紀末の弘治年間に沔水が郭師口のところで長江に直結するようになつて漢口が船舶の停泊する地となり、市街が盛んになつた。漢口は街市が数十里続き、商賈の家が数千家あり、塩商の倉庫また数十処、大船が着岸し、貨宝珍奇が聚り、天下の名鎮となつた。その後明清の際の戦乱で戸の八、九割が散じた。清朝に入つて再建が始まると次第に戸が集まり、日々隆盛を取り戻し、人才も輩出するようになった(17)。

三、漢口の行政と地域社会

『漢口叢談』巻一、13Aには、

同知署、旧在大智坊四官殿、後廢而復設、即今之督捕清軍同知也。

巡檢司署、旧在南岸、後移北岸同知旧署。嗣同知復設、巡檢退居民舍、因即為署、改名礼智司。雍正五年、増設仁義司巡檢、署在居仁坊旧天主堂。

雍正八年、増設水師外委千把總署、水師額外外委署。

水師守備署、乾隆三年、移駐大智坊。

乾隆三年、總督德沛奏請以武昌水師營守備一員、千總一員、把總二員、經制兵二百八十一名併漢陽營、移駐漢口、仍管理水師船隻事務、以資巡緝警虞。所謂五方雜処、姦宄是防也。上下各設有閑隘、属于武昌、征稅上自襄

河、下及大江、舟楫往来、藉以稽防奸盜、上関至下関、東西二十余里。

市鎮の行政は、いくら戸口数が多くとも、府の同知衙門があるだけであったが、漢口鎮ではもと大智坊四官殿に在り、その後廃されて今日督捕清軍同知となった。四官殿は漢水が長江に注ぐ河口にあり、一名火神廟、清の順治八年に瞿恒岳が建てた。漢口六渡の一が所在するところでもある。本稿二、の冒頭に引用した『漢口叢談』巻一文中で漢口鎮は居仁・由義二坊の上路が仁義司汛地に、循礼・大智二坊の下路が礼智司汛地に属していたとあったが、巡檢司署は明代、もと南岸にあり、後に北岸の同知旧署に移った。ついで同知署が復設されたので巡檢は民舎を署とし、礼智司と改名した。雍正五年（一七二七）仁義司巡檢が増設され、居仁坊の旧天主堂を署とした。雍正八年には、水師外委千把總署、水師額外外委署が増設された。水利守備署は乾隆三年（一七三八）漢口鎮、大智坊に移駐された。この年湖広總督徳沛は武昌水師營守備一員、千總一員、把總二員、經制兵二百八十一名を漢陽營に帰併し、漢口に移駐させ、水師船隻事務を管理させることを奏請し、許可された。雍正から乾隆初年にかけて長江水運の拠点としての漢口の重要性の影響であるが、それが雲南銅の京運の開始時期と一致していることも注目される。因に同治『続輯漢陽県志』巻六、橋梁には「救生船義渡」を挙げ、

乾隆三年、奉上諭、湖広地方三湘七沢、水勢汪洋。凡有応設救生船之処、著該督撫確勘、照江南一例辦理。欽此、十一年、奉部覆准、湖北救生船、照内河戰船年限修造。漢陽県隻十隻、又牛湖渡船三隻。

とあって、長江救生船の設立も乾隆三年であるという。長江水運システムが乾隆期に入るやにわか整備されることがわからう。

四 漢口の宗教施設と商業活動

すでに本稿二で記したごとく、漢口では、大王廟が兩淮塩商の公議の所、天都庵また塩商公所、西関帝廟が山陝公所となり、九華庵が江西商人の公所となったというように宗教施設が商業活動に利用されていた。その他としては『漢口叢談』巻二に（番号は表1の番号参照）

27 西来庵、……按、読碑文、当時庵址宏壮可知。今已半属民居、余多敗損。内賃賈客、堆貯貨物、外作茶肆、中供閔聖像、寺門無懸額、幾不知西来庵之名矣。

28 宝樹庵

136 大王廟（前出）

83 禹王閣、在接駕嘴渡口、郡民渡河、往来要道、歳久傾圮。前令劉嗣孔、奉撫軍晏公之命、率里人勸捐修建、康莊崇煥、氣象一新、頗称鞏固。無如屢犯回祿之灾、頻修頻燬。蓋接駕嘴上下数里、商賈雲集、五方雜居、尤為漢口市盛之区、故雖時遇祝融、亦易修築。奈于嘉慶庚午（一五年）大火之後、次第創造、已為竭蹶。復于己卯（嘉慶二十四年）被灾、元氣未復、民力益艱、迄今尚無倡捐者。

11 四官殿、一名火神廟。国朝順治中、里人瞿恒岳首創募建。熊伯竜譚碑記云、五行皆生人之資。独火烈、民望而畏之、蓋有神焉、不可度思矣。……楚介南服、火德居望、而漢鎮又適當五達之衢、黔廬赭壁、何時蔑有。……方伯劉公（頭貴）、臬司陳公（丹陞）、監司饒公（？）、王公（？）、朱公（？）、……各捐俸金若干、竝及本郡、紳紳商民、量力資助、革故鼎新、而廟貌由是改觀矣。

131 廻竜寺

149 馬王廟（後出）

12 天寶庵

19 藥師庵

194 天都庵（前出）

196 大觀音閣、閣奉觀音大士像、金身丈六、妙相莊嚴、每于二月十九日大士誕辰、士女禱祝、寶馬香輿、寺門填溢、

香火甚盛。相傳昔有木賈、從蜀中運像送普陀山、道出漢口、因事暫供後湖。初創竹屋、蓋覆後、屢著靈異。木賈

亦久不至、鎮人遂募建高閣崇奉焉。

73 准提庵、在文公橋下首、橋即旧名九如橋、在沈家廟後也。……清和天氣好、澹宕客懷多、野館傳香茗、旗亭問綺

羅。幾時重把袂、隄上踏青莎。

97 慧蓮庵

60 西閔帝廟（前出）

125 九華庵（前出）

149 馬王廟左右有驛馬店、以駐陸路往來富商貴客也。當塗黃左田鉞驛馬店詩、驛馬店、乃在漢口馬王廟。富商大賈來、

暫惕卸驟轡。有屋數十楹、幽暗失窺突。不知何許人、出入祇取鬧。……階下何所有、糞穢堆庭隅。樓上何所有、

窳宰惟群狐。狐于樓上作人步、似怪客來非所據。狐兮狐兮尔何怒、明月天明渡江去。

167 楊林口、在馬王廟下教里、沿江之街市也。王孟谷『江上懷竜星濠・許謙次』云、楊林晚泊候潮平、船趕風來波浪

生。旧雨何当慰離索、新秋劇可愜曾情。阿竜早著江南錄、大許曾聞月旦評。鄂渚市樓梧竹影、枕流沽酒待同傾。

楚俗以五月望月為大端陽節、剪紙為竜船、中坐神像、自朔旦起、至十八日上、鼓鉦爆竹、灯火誼闐、昼夜不輟、

舳舳皆然。楊林口為更盛。數十人駕一小舟、衆漿齊飛、疾如風雨、鼓声人声与水声相応。岸上觀者如堵、謂之竜舟競渡。亦有士女、坐四柱青幔之船、竹簾傍挂、肴釀笙歌、出游助興。

39 五頭廟、馬頭對岸、為月湖之郭公堤。……漢上士女、每值春來花放、擊侶渡河、澹抹濃妝、及時行樂。

以上であるが、漢口は道教関係の土俗の廟宇樓閣に市街が形成され、宗教文化と經濟商業活動が密接に結びついてきたことが知られるのである。また、交通の神馬王廟近くの楊林口では五月端午の節に大規模な竜舟競渡が行われるなど、年中行事も道教、仏教と関係するものばかりであった。一例を挙げれば、六月には関王会が有り、郷間では演劇が催され、秋收穫時の賽会には高躡とよぶ、竹馬の雜伎が恒例となっていた。

五 『漢口叢談』中の人々

漢口には五方雜居、四方商賈輻輳の地といわれる。『漢口叢談』の著者范鏞にしても、浙江湖州府の南潯鎮の人で、兩淮塩商として漢口に來たものであった。『漢口叢談』に叙述される人物を検討してみよう。

(1) 張三異、字魯如、号禹木。家居豊楽郷、在後湖之北、有泉名柏泉、旁有柏泉寺。……順治己丑進士、官至紹興知府。子孫皆貴顯。……按閱邑志、張氏四代科甲、讀書榮仕、抑何盛哉。近則人嘆式微、屋嗟茂草矣。然聞尚有一支、寄籍維揚、遺經能守、未絶簪纓。(卷三、2AB)

(2) 勞必達、字磊卿、号尊三。康熙辛丑進士、官昭文知県。家居唐家巷正街。母朱氏、年二十九而寡、必達甫週晬、会呉逆煽乱、抱孤四匿、紡績撫育、備嘗艱苦。迨必達出仕、氏已先逝。雍正三年請旌。(卷三、2B)

(3) 李雲田、……按雲田、名以篤。居邑之官橋。多才負氣、少時俯視流俗、歷游秦晋呉越京師豫章、卒無所遇。乃縱情于綠齡紅粉。(卷三、3B)

(4)王孟穀、……按孟穀、名戡、康熙戊子副榜。舉山林隱逸、未赴。學該博、工詩、為新城王漁洋器重。父士乾、好學有大志、崇正己卯舉人、陝州牧家賓子也。任長沙府教授、以令墨被劾、波及成大獄。子戡走京師、上訴得白、戡亦名著都中矣。士乾女希貞、通女史箴訓、守節養姑、姑死不食而殉。(卷3、4A)

(5)彭擬陶……按擬陶、名心錦。幼警敏好學、年二十八、貢入太學、屢試不售。言動端謹、恂恂若處子、生平以束脩自給、弱冠飢驅、家食率不能經歲。而頻年旅舍、衣冠危坐、即盛暑未嘗科跳、三入京師、恥于自炫。堆案盈几、排纂不暇、時以道學目之。(卷三、5A)

(6)文賓門、……按賓門、名師汲。嗜讀書、負氣性、為文疏爽而峭勁。詩多沈鬱、五律尤健。生平善揮霍、數十百金、隨手輒罄。(卷三、6A)

(7)汪逐漁、原名穎、字鈍予。數歲解吟詩、有孔李之譽。長而雅好韜略、講求經濟、思以功名自見。(卷三、6B)

(8)項大德、字立上、又字容亭。少敏慧、八歲能誦五經、与兄大復字来一同時入泮。其先歛人、祖璘質遷漢口、因家焉。父誠、出守四川順慶·成都兩郡、以卓異著名、卒于京邸。(卷三、7B·8A)

(9)吳邦治、字允康、号鶴閑。歛之信行里人、僑寓漢口。与段寒香·彭念堂称漢陽三老。好學多藝、性頗耿介。居有駕飛樓。(卷三、8AB)

(10)歛張玉坡宏殿、与鶴閑風雅齊名、同為漢上寓公。有『綠溪草堂集』。……又于乾隆元年、作漢江詩會啓、如『綠筠軒看碧桃分籠』、『長至後一日黃燕臣招集天都庵共用晴字』。汪鶴艇、柳亭漳『同人後湖納涼分韵集』、程且庵『丁樓賦詩』、王坡皆有序。(卷三、9AB)

(11)宜興儲六雅大文、『存研樓集』漢濱楊柳枝詞、宜興宜風十萬枝、漢南春望綠參差。……儲氏文章門第、著于江南。六雅哲嗣潤書号玉琴、工于時芸、兼擅詩賦、屢蹟文場、僅以優貢終。嘗為漢上游、与吳澹止狎主齊盟、繼鶴閑玉坡之風流、亦極一時之盛。(卷三、10B)

(12) 吳澹止、名求、字警堂。歙人、入籍儀徵。少聰穎、博聞強記。嗜作韻語、詼諧不羈、未嘗向人作乞憐語。雖貧無長物而衣冠修整如富人。其寓舍有釵鼎齋耕古居、甲辰、乙巳之間、聯吟集詠、半在其家。客漢數十年、詩數千首、身沒、子幼、散佚殆盡。寒食後三日、畢展未過余耕石居、魯星村·儲玉琴·黃心齋亦相繼至。(卷三、11 B)

(13) 畢花薑、字展未。休寧人、隸籍鎮洋。以孝廉令湖南永興。罷歸、主講晴川書院。卒于丁巳。(卷三、12 A)

(14) 魯星村、家皖城(安徽)中之盛唐山。客游漢口、多主洪氏寓齋。……星村書法大米、筆力磊落、如其為人。作詩專写性情、不尚免園冊子、專宗唐律、不捨宋後塵氣。著『盛唐山人集』。(卷三、12 A B)

(15) 夏永、字石壘、号松期老人。我友芳原之助之大父也。喜歡詠、愛交友、晚自江右來楚、愛晴川山水之勝、因家漢上、買田終老、遂入籍焉。築烟鬢閣、与四方往來諸名士酬倡其中。著『烟鬢閣詩草』。……按、芳原字銘旂、性恬靜端謹、酷嗜金石文字、善篆、隸書及設色花卉。所居烟鬢閣、藏弃碑版書画鼎彝之玩甚多、与余交二十余年、或聚或別、相見如一、從無濃淡之色。詩不多作、筆饒逸致。(卷三、13 A B)

(16) 孫漢、字倬雲、号楚池。世家休寧草市、入籍漢陽。乾隆乙丑進士、選庶吉士、官至御史。吾友石樓煦之世大父也。(卷三、13 B)

(17) 吳仕潮、字韓若、漢口人。原籍歙。工詩、尤長于五言。性好客、吟朋常滿座也。『懷人』詩數十首、以紀交游。其自序云、……計詩三十八章、約以相識之後先為次、歿与存、爵子齒、均弗論焉。乾隆丙申十月、鳳浦吳仕潮識。(卷三、14 B)

(18) 彭湘懷、字念堂、号棟塘。漢口人。嘉藏書、性孤介、落落不苟交。南游吳越、北至都門、出居庸、歷俺荅旧部、閱塞山川、供其吟眺。著有『三山游草』·『西湖紀游』·『獨特皋廡』諸集。(卷三、15 B)

(19) 王文寧、字山客、号樸門。先世陝西蒲城、以業饑家漢口、閱代矣。磊落好交游、復耿吟咏。嘗手『王右丞集』、尋繹不倦。著有『浥露軒詩鈔』、頗具清矯淡遠之致。(卷三、16 A)

(20) 劉光、号実齋。漢口人。好學有文才、優蹇不寓、晚耽禪悅。秋齋「懷人詩」云、実齋腹貯書、癖在五車內。詞賦洞源流、理學明興廢。(卷三、16 A)

(21) 危煥枢、字子政、号白門。少有文名、試輒不售。客有以危姓為嫌者、因改氏曰元。工詩画、綜覽群籍、勤于攷証。余于夏芳原之助齋頭見其手校「隸積」「隸統」、及所作「梅花」詩甚佳。(卷三、16 B)

(22) 方世克、字勲遠、漢口人。原籍歙縣。性好學、詩思敏贍。(卷三、17 A)

(23) 段嘉梅、字寒香、号夢鶴。漢陽諸生。工吟賦、幕游滇南久矣。「懷人詩」云、段翁癯且清、不媿以梅名。賦詩羞貌古、往往古可并。鑄局顏光祿、琢句庾蘭成。苦雨走詩筒、險韻凡屢廢。時余不畏虎、有如犢初生。(卷三、17 A)

(24) 李廷梓、字煌柱。事父孝養、父歿、喪葬尽礼。生母張、被出、久無音耗。服闋、乃徒步徧訪于湖南、江右、十年始得之昇陵尼舍。迎歸奉養、十八年乃卒。(卷三、22 B・23 A)

(25) 黃鶴鳴、字凌江、乾隆辛巳進士。官宜昌教授、与弟子雲明經從童、皆以時文名。詩不多作、而凌江絕句、頗有風神。(卷三、26 B)

(26) 戴諭讓、字思任、号景舉。家漢口。乾隆辛酉(六年)舉人、素有文名、由房縣教諭、補惠民知縣。有「聽鸞堂」春草吟「春声堂」諸集。古体詩、能別出新意。(卷三、26 B)

(27) 王彭沢、字五柳、嗜丹青、善医理、懸壺漢口市、貧者仍不索值。有「尺木堂詩稿」。(卷三、27 A)

(28) 朱在鎮、字定山、号蘭田、漢口名布衣也。善書工詩。嘗游金陵、与諸名士賦鳥夢、限四支韻、援筆先成、衆為擱筆、一時伝賞。(卷三、27 B)

(29) 趙湘、字秋屏、上舍生。少美鳳儀、詩才清雋。(卷三、28 A)

(30) 漢上写真名手、以曾秣田第一。繼其後者、当首推閔貞。貞字正齋、其祖自広濟遷漢。幼孤、思親不置、因刻苦習伝神之芸、數年遂妙絕一時。(卷三、28 B)

(31) 路鐔、字鳴于、号梅峰。少佐兄釗豫閩諸邑幕、諳達利弊、由例捐塩大使、官浙江、擢平湖県、遷海防同知、卒于官。(卷三、29 A)

(32) 尚錦堂、字香雪。諸生、能詩、有『東游草』、書画奇崛可喜。家貧甚、不以介懷、飲酒賦詩自若也。(卷三、31 B)

(33) 常芝仙、先籍蕪湖、遷徙漢上、閱三世矣。少英敏、耿情文史、長工書画、晋唐宋元諸大家之法、無不神領意造。

精于賞鑒、能歷指其瑕疵、以定真贋。(卷三、31 B)

(34) 仲節女、浙之湖州人、隨父賈于楚。有殊色。(卷四、8 B)

(35) 歙県呉美堂、業鹺漢口、富而好奇。……按、呉德芝、工詩文、以明經終老。(卷四、19 A B)

(36) 江紹蓮、……紹蓮、字房聯、又字依瀛。歙之檀里人、貢生。好学、癖吟詠、又善搜羅奇聞異事。(卷四、24 B・25 A)

(37) 范蓮實至渥、歙之獅塘人。家素封、援例授州司馬職、後中落、不屑依人生活、常隻身往来郎裏之間、販鮮鬻果以自給。詩文書画琴弈而外、音楽演劇、刺綉雕塑、無不能之。膂力近千斤、手技能却五六十人。(卷四、32 A)

以上の中、漢口の土地の人は(1)張三異、(2)勞必達、(3)李雲田、(4)王孟穀、(5)彭擬陶、(6)文賓門、(7)汪遜漁、(8)彭湘懷等である。安徽の徽州人は(8)項大徳、(9)呉邦治、(10)張玉坡、(12)呉澹止、(13)畢花薑、(16)孫漢、(17)呉仕潮、(22)方世克、(35)呉美堂、(36)江紹蓮、(37)范蓮實と数多い。その他でも江西、安徽、浙江出身者や陝西、山西、山東等の商人の漢口に來た者が数多く紹介されている。漢口は正しく移民社会、都市であつた。

小 結

清一九世紀前葉に書かれた范鏞『漢口叢談』を史料として清朝中期の漢口について考察してみた。漢口の環境と都

市景観、行政と地域社会、宗教施設と商業活動、漢口の人々については叙述したが、漢口の学問文化、風俗習慣等については今後の課題とする。

『漢口叢談』を唯一の史料として叙述した。多数の文献を博捜し、それらを比較検討の上、史実を確認していくのが史学の王道であれば、一書しか使用しないものは歴史研究と言えない。この批判の解答も今後に残すこととする。

註

- (1) William T. Rowe : HANKOW, (1) Commerce and Society in a Chinese City, 1796—1889. Stanford U. P. 1984. (2) Conflict and Community in a Chinese City, 1796—1895. Stanford U. P. 1989.
- (2) 川勝守「中国近世都市の社会構造—明末清初、江南都市について」『吏潮』新六号、一九七九年。同「長江デルタにおける鎮市の発達と水利」『佐藤博士還暦記念・中国水利史論集』一九八一年。同「中国地方行政における県と鎮」『九州大学東洋史論集』第十五号、一九八六年。同「明代、鎮市の水柵と巡検司制度—長江デルタ地域について—」『東方学』第七十四輯、一九八七年等。
- (3) 近時、一九九〇年八月、中国・湖北人民出版社から湖北大学教授江浦、同、朱忱、同、饒欽農、同、胡錦賢氏らの校訳本が出版されて有益である。
- (4) 咸豊『南潯鎮志』卷十三、人物二による。
- (5) 川勝守「清初、莊氏史禍事件と南潯鎮社会」『九州大学東洋史論集』第十一号、一九八三年、参照。
- (6) 彼は晩年、悪少無頼の騷擾するところとなり、巡按御史、烏程知県に抗撃された結果自縊死している。一族離散の遠因となった。
- (7) 鈴木中正『清朝中期史研究』愛知大学、一九五二年、参照。
- (8) 『六部成語註解』兵部、汛地に「縁管官員所属之本処、曰汛地。」という。
- (9) 長江下流デルタではこれを圩田、团田とよぶ。日本の濃尾平野の輪中のごときものである。
- (10) 川勝守「清・乾隆期雲南銅の京運問題」『九州大学東洋史論集』第十七号、一九八九年、参照。